

平成 29 年度
第 3 回いわき市地域包括ケア推進会議
議事録

保健福祉部 地域医療介護室
地域包括ケア推進課

平成 29 年度第 3 回いわき市地域包括ケア推進会議議事録

1 日 時 平成 29 年 12 月 20 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

2 場 所 いわき市 文化センター 1 階 大講義室

3 出席者

委員	箱崎	秀樹	委員	上遠野	理恵
委員	渡邊	健二	委員	鈴木	繁生
委員	園部	義博	委員	木田	佳和
委員	齊藤	隆	委員	板東	竜矢
委員	木村	守和	委員	山内	俊明
委員	松村	耕三	委員	田子	久夫
委員	中里	孝宏	委員	根本	寿子
委員	長谷川	祐一	委員	強口	暢子
委員	篠原	清美	委員	林	清
委員	古山	綾子	委員	鎌田	真理子
委員	高沢	祐三			

※ 増山祥二委員、菅波香織委員、新家利一委員欠席

4 事務局

保健福祉部	次長 (総合調整担当) 兼地域医療介護室長	飯尾	仁
保健福祉課	参事兼課長	園部	衛
障がい福祉課	課長	長谷川	政宣
地域医療課	参事兼課長	藁谷	孝夫
地域包括ケア推進課	課長	佐々木	篤
長寿介護課	課長	駒木根	通人
保健所総務課	参事兼課長	中澤	秀夫
保健所地域保健課	課長	相原	好子
平地区保健福祉センター	所長	鵜沼	宏二
小名浜地区保健福祉センター	所長	緑川	直
勿来・田人地区保健福祉センター	所長	福田	敦美
常磐・遠野地区保健福祉センター	所長	四倉	歩
内郷・好間・三和地区保健福祉センター	所長	村木	宏一
四倉・久之浜大久地区保健福祉センター	参事兼所長	堀川	盛敏
小川・川前地区保健福祉センター	所長	矢吹	和義
平地域包括支援センター	管理者	吉田	郁子
小名浜地域包括支援センター	管理者	加藤	幸恵
勿来・田人地域包括支援センター	管理者	野口	富士子
常磐・遠野地域包括支援センター	管理者	小岩	洋子

内郷・好間・三和地域包括支援センター 管理者
 四倉・久之浜大久地域包括支援センター 管理者
 小川・川前地域包括支援センター 管理者
 地域医療課 主幹兼課長補佐
 地域医療課 主査
 地域包括ケア推進課 主幹兼課長補佐
 地域包括ケア推進課 企画係長
 地域包括ケア推進課 企画係 主査
 地域包括ケア推進課 企画係 主査
 地域包括ケア推進課 企画係 主事
 地域包括ケア推進課 主任主査兼事業推進係長
 地域包括ケア推進課 事業推進係 主査
 地域包括ケア推進課 事業推進係 事務主任
 地域包括ケア推進課 事業推進係 事務主任
 長寿介護課 課長補佐
 長寿介護課 課長補佐兼徴収推進担当員
 長寿介護課 長寿支援係長
 長寿介護課 主任主査兼介護保険係長
 長寿介護課 介護保険係事業推進員
 長寿介護課 介護認定係長

松田和枝
 熊田智英子
 藤館友紀
 酒井光
 阿部征人
 池田一樹
 青木崇徳
 瀬谷伸也
 猪狩僚
 小野光貴
 佐藤和幸
 金成聡司
 門馬理沙
 相川朋生
 安井淳
 鈴木英規
 藤館克共
 坂本紀一郎
 坂入直人
 吉田雅昭

5 議事

【協議事項】

- (1) 地域包括ケア（システム）とは
- (2) 前回の主な意見
- (3) 本人の選択と家族の心構え
- (4) すまいとすまい方
- (5) 介護予防・生活支援
- (6) 医療・看護・介護・リハビリ・保健福祉

6 当会議の公開について

当会議について、市民への公開を原則とし、議事の内容を市ホームページへ掲載することで、広く周知を図ることとなった。

7 議事録署名人の選任

議事に先立ち、本日の議事録署名人について、園部委員、木田委員が選任された。

8 会議の概要

事務局	〈「1 地域包括ケア（システム）とは」「2 前回の主な意見」説明〉
事務局	〈「障がい分野の動きなど」説明〉

<p>A委員</p>	<p>自立支援協議会でも色々なことを話し合っているところであり、地域包括ケアの植木鉢の一番下、本人の選択と本人・家族の心構えの部分が毎回議題に挙げられるが、障がいの分野においても、意思決定支援ガイドラインというのが厚生労働省から出されて、ご本人の意思決定をいかにして支援していくかが非常に重要視されている。高齢、障がい関係なく、どこで誰と暮らしていくのかというような、日々のささやかな決定から、大きな人生決断まで、ご本人がより良い選択ができるようにしていかなければならない、ということでは一致するように思う。また、地域生活拠点の整備については、遅れてはいるが、先進地の方をお呼びして、いわき市と一緒に学びを深めるなどしながら、取組みつつあるところなので、今後ともよろしくお願いしたい。医療的なケアが必要な子どもたちについては、これまでずっと我慢されてきたと思うので、いわき市を皮切りに現状を変えていきたい。</p>
<p>事務局</p>	<p>〈「3 本人の選択と家族の心構え」「4 すまいとすまい方」説明〉</p>
<p>木村副会長</p>	<p>いごくフェスについてだが、入棺体験など、死をタブーにしないという考えから企画されているようなので、どこで配るかはさておき、医師会と行政が協働して作成したわたしの想いをつなぐノートを活用して、元気なうちからそうしたことを考えていこう、と来場者に提起してはどうか。</p>
<p>高沢会長</p>	<p>ただいまの意見は、この資料を作成する段階での打合せにおいても話にのぼっており、やろうという方向で進めている。</p>
<p>B委員</p>	<p>自分が認知症になること、自分がやがて死ぬことは、誰も想定していない。認知症になったとしても、それを自覚することは難しいので、そうなる前から準備を進めておく必要がある。若い頃の考えというのは、年を取ってからも残るものなので、こうした取組みを進めることは重要だと思う。</p>
<p>高沢会長</p>	<p>いかに普及啓発を進めていくかにかかっているので、イベントについては、若い方にもどんどん来ていただきたいと考えている。</p>
<p>C委員</p>	<p>住まい部会の設置準備会に参加したが、色々な意見が挙がったので、それらを整理しながら、市と連携の上、できることから対応していきたい。</p>
<p>D委員</p>	<p>後見人や補佐人が付いている方の住まいを探す際に、保証人がいないというケースがそれなりにあり、お金がある方については、民間の保証の契約などを活用していただいているが、どうしようもないときには、生活保護を受給してもらって、保証人を必要としない施設などに入居していただく。市営住宅が保証人を必須としている点は、何とか改められないものかな、と個人的には感じている。</p>

高沢会長	<p>公営住宅でも保証人を2人必要とする場合もあれば、所得証明などを提出しなければならない場合もある。かつては低所得者向けということで、第二種住宅という、生活保護の方が入れる住宅があちこちにあったが、老朽化があまりにも進んでいたがために、住人がいなくなったところから取り壊した経過があり、それゆえ受け皿が乏しい状況にある。また、災害公営住宅については、入居から何年かが過ぎて減免が切れると、その地域における標準的な額となるよう、段階的に家賃が値上がりする制度となっており、問題が生じているようだ。我々が直面している住宅問題は厳しい状況にあり、特に、低所得者、障がい者、高齢者の保証人問題については、土木当局とも協議を重ねる必要があると認識している。</p>
A委員	<p>火葬まではできても、お骨をどうするかに困る、と資料にはあるが、これは高齢分野に限ったことではない。障がい者施設に入所されていたある方は、御両親がすでに亡くなられていて、職員の付き添いで年に何回もお墓参りをしていた。この方は若くして亡くなられたが、お墓を承継する方がいないということで、いまだに事業所の事務室にお骨が置かれている。市とも話し合ったが、なかなか進まないで、しばらく一緒にいてもらおう、ということになっている。これからの時代、そうしたケースが増えていくかと思われる。市民生活課と連携しながら、障がい分野においても、お骨をどうするかというところまで考えていきたい。</p>
E委員	<p>遺骨の件についてだが、後見人をつけると、葬儀や埋葬といった死後の対応も柔軟にできるので、まずは成年後見制度の活動を促進していただければ、というのが一点。もう一点は、住まいについてだが、ある自治体で住民の反対により障がい者グループホームの建設が頓挫したことを受け、障がい者差別解消法の附帯決議には、行政が責任を持って障がい者の住まいを確保していくように、と書かれている。いわき市内でも、かつて似たようなことがあったと聞いているので、障がい者の住まいというところで、啓発を図っていただきたい。</p>
高沢会長	<p>以前は、障がい者の施設を作る場合に、地元の同意を得る必要があったが、今回の差別解消法における附帯決議では、それを必要としないことが書かれている。ずっと昔、本市においても、障がい者の作業場を作ろうとした際、地元の反対により断念せざるを得なかったことがあり、当時よりはこの領域に対する理解が進んでいるとはいえ、普及啓発には積極的に取り組まなければならない。障がい福祉課でも、差別解消法については、色々と揉んでいるところなので、御意見いただいた点も踏まえて、検討を進めたい。</p>
事務局	<p>〈「5 介護予防・生活支援」説明〉</p>
高沢会長	<p>市で考えているのは、シルバーリハビリ体操に参加することで、どのよ</p>

	うな改善が見られたのか、というような指標を定めて、はっきりと見える形での結果を得たい、ということ。どのようにデータを集めていけば、統計学的に有用なものとなるのか、といった点について、今後、専門職の方々とも相談をさせていただきたい。つどいの場に参加することで、身体の状態が維持できているだとか、改善が見られるだとか、そうした動きを捉えて、皆様にお示ししたい。
木村副会長	効果を調査するのは素晴らしいことだが、住民支え合いのほうへ持っていくということも、考える必要があるだろう。
高沢会長	裾野を広げていただきたいと、市としても考えているところだ。
E委員	活動をサステイナブルなものとするためには、法人格を取得することも視野に入れる必要があるだろうし、四倉新町はその段階であるように感じている。
F委員	介護度が進んでしまうと、シルバーリハビリ体操に参加できないというのが、大きな問題だ。総合事業の訪問Cなどを使って、リハビリ専門職が体操のアレンジメントを行うことで、継続できるよう支えられる仕組みができればと思う。
G委員	介護予防ケアマネジメント推進会議に参加しているが、その会議によって、対象者さんの状態にどのような変化があったのか、そこまで明らかにできればと思う。
H委員	第3層の支援を続けているところで、自立した活動となりつつある。第2層については、課題の掘り下げを進めており、市と協働しながら、活動の創出に努めたい。
I委員	復興公営住宅は、町村ごとに棟が分かれているなどの理由から、住民同士の交流が難しいという現実にあるが、我々のほうでみんぷくなどと連携しながら、集会所を中心とした自治会組織の構築を進めているところだ。
J委員	住民支え合い活動づくり事業は、社協の職員さんの負担が大きいように感じられ、高齢者の見守り隊などの既存の活動との整合性に、住民の方々も混乱しているように見受けられる。新しいものを次々に起こしていくのも素晴らしいことだが、これまで取り組んできたこととの有機的な連携についても、考えていく必要があるのではないかな。
事務局	〈「6 医療・看護・介護・リハビリ・保健福祉」説明〉
木村副会長	医療と介護の連携についてだが、医師会のほうで在宅医療ネットワークというものを立ち上げ、具体的な連携体制を構築したところ。今回お配り

	<p>したのは、関係機関向けのものだが、ゆくゆくは市民向けのものも作成したい。行政の方々と協力しながら、多職種研修会にも取り組んでおり、これからもよろしくお願ひしたい。</p>
高沢会長	<p>市と医師会がやる気を見せて、引っ張って参りたい。</p>
B委員	<p>認知症初期集中支援チームの実態は、正直なところ、曖昧模糊としている。認知症の初期段階にある方へのファーストタッチを迅速なものとして、重度化を防ぐというのが本来の目的であるが、実際に対応しているケースとしては、かなり重度化したものばかりとなっている。認知症という言葉は周知されているが、具体的にそれがどのような症状を呈するのかについては、啓発が進められていない。認知症に対する意識から変革していかなければならないというのが、1年間やってみての感想だ。</p>
G委員	<p>リハ専門職がつどいの場に出たくとも、事業所の代表の理解を得られないことが多いと聞いているので、地域包括ケアの概念を事業所にも知ってもらって、職員を派遣しやすくなるような啓発をお願ひしたい。</p>
木村副会長	<p>大牟田市は介護事業者の連絡会議を持っており、その中でかなりの時間を費やして、認知症のコーディネーターを育成しているようだ。連絡組織を作るということは、民間ではやっていくのが難しい部分なので、行政の御協力がいただければと思う。</p>
K委員	<p>常磐の釜ノ前に住んでいるが、ずっと前にあった孤立死をきっかけに、見守り活動やサロン活動に取り組んでいる。</p> <p>〈その他〉</p>
木村副会長	<p>認知症絵本教室は、実に効果的な取組みで、小学生は理解が早い。大人になったら、医療や介護のような職に就いて、いわきに戻ってきてください、というところまで伝えている。また、在宅医療に関連する事業の報告会をクレールコートで開催するので、希望する方については、ぜひお申し込みください。</p>
D委員	<p>虐待の対応に取り組んでいる部署は、市のどこになるのか。また、権利擁護の啓発について、市はどのような取組みを行っているのか。</p>
高沢会長	<p>地区保健福祉センターや地域包括支援センターで対応しているところであり、保健福祉課に設置された権利擁護・成年後見センターがそれをバックアップしている。周知の点では、年に1回ほどの大会を開催しているが、その充実についても検討していきたい。</p>
E委員	<p>施設での看取りについて、親族から社福法人への苦情が多いと聞いてい</p>

	るが、これはグリーフケアが十分になされていないことが、原因にあると思われる。今度のイベントでは、入棺体験のような、死をタブーとしない姿勢が表れており、非常に素晴らしいと感じるが、グリーフケアの視点についても、御検討いただければと思う。
--	---

本議事録に相違ないことを証明するため、ここに署名する。

平成30年 3月 9日

議事録署名人

園 部 義 博 (印)

議事録署名人

木 田 佳 和 (印)